

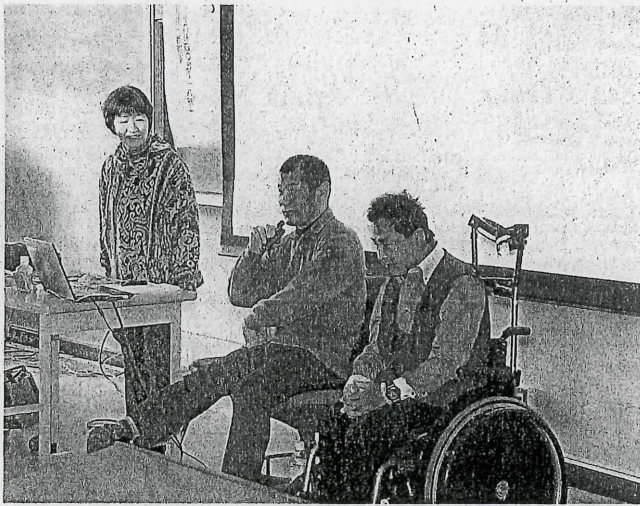
# 「放射能公害」に教訓生かす

悔しい思いが募るが、今は将棋を生きがいにしていく」と報告した。

水俣病の教訓を東京加。加藤さんのほか、電力福島第1原発事故同施設利用者で患者の永本賢二さん(54)と松にも生かそうと、茨城大の教員有志が14日、演じた。

水戸市文京の茨城大で、胎児性水俣病患者らを招いた講演会を開催した。生活支援施設「ほっとはうす」(熊本県水俣市)を運営する加藤タケ子施設長(63)は公害からの地域再生について、「市民レベルの連携で乗り越えていく必要がある」と指摘した。

同施設の胎児性患者で唯一歩行できる永本さんは「『いつ車椅子になるのかな』と思いなながら生きている」と不安を吐露。原因企業チッソの労働者だった父が会社と闘ってくれたエピソードを披露し、父への感謝の気持ちを語った。また、約4年前に歩けなくなった松永さんは「チッソの工場前を通ると



## 水俣病患者招き講演会 「市民連携し地域再生を」

水俣病の経験を語る胎児性患者の永本さん(中央)と松永さん(右)。左は「ほっとはうす」施設長の加藤

さん―水戸市文京の茨城大で

【鈴木敬子】